

私をダメにする

にする

Dolce

私をダメにするDolce
～妃に選ばれなかったので城を出たら
第五王子が着いてきました～

◇◇◇…：プロローグ

春の訪れを告げるような柔らかな風がどこからか吹き込んできて、頬を撫でられた気がした。

謁見の間に集められた妃候補たちは、着飾って整列をしていた。今日この場に呼ばれた理由を全員が把握していながら、誰もが口を閉ざして殿下の言葉を待つ。

「皆には、本当に申し訳なく思っている」

クライヴ殿下の声は、力強くも真摯だった。王座の前に立つその姿は誰よりも堂々としていて、高い窓から射した陽光で美しい金髪は更に輝く。騎士のように鍛えられた広い肩、そしてモスグリーンの瞳が静かに、女性達を見渡している。

「今後の事は、出来る限りを尽くしたい。働き先を探している者には紹介状を、縁談を望む者がいれば誠実な相手を探す努力もしよう。遠慮なく申し出て欲しい」

（殿下は悪くないのだけれどね……）

次期王となる予定の第一王子のクライヴ殿下の妃候補が募集されたのが十六年前。当時は魔物との戦いが激化していたので、候補の条件として聖女の力が使えるというのが必須であり、貴族がこぞって自分の娘や、聖女の力を持っている娘を探して養子縁組し、城に送り込ませて聖務にあたらせていた。

私もその一人で、孤児のため幼い頃は教会で暮らしていたが、聖女の力が顕現した際に噂をききつけたラストー家に強引に連れられて、分不相応ながら城で暮らしていた。

聖女としての力は候補者の中で一番強く、私が聖務の研究の一環として行っていた結界や魔力の蓄積などの分野が成功し、魔物との戦いは徐々に沈静化したので、クライヴ殿下の地位は上がり、妃の第一候補と言われていた。

しかし、当時の大人たちに翻弄され「問題」が起こってしまった初夜のせいで、私と殿下は国の為の「良い同志」という関係は上手く築けても、実のところ男女の関係は全く進まな

かった。

私は妃の第一候補とされていたものの、長い間「決め手」が無く、他にも妃候補が多数いたの、実質「誰かに子供が出来たら婚姻」という空気感は強かった。

クライヴ殿下の性格上、たくさんの女性に手を付けたくないという誠実さが強いので、他の女性に対しては紳士を貫き、唯一私の所へはカモフラージュの為に通っていた。

実際には通っているだけで体の関係が無いのだから、私は大勢の人から「力もあつて寵愛も十分だが子供ができない」と思われていたと思う。

そんな時に現王が病の悪化で床に臥せ、ついにクライヴ殿下の即位の日が決まりつつあった。

しかし、最近になって事態は急変した。

もう国全体の治安は良くなりつつあり、新たな妃候補などは来なくなっていたのにどこからともなく現れた聖女がいた。

殿下と急激に親密になり、妊娠したという。

広間の中で、妃候補たちの声を押し殺したようなすすり泣きが響く。他の妃候補たちの気持ちとは分かる。悲しむのも怒るのも当然だ。私は一番長くここにいるけど、他の女性も少なくとも何年もここで聖務にあたっていた。

今までは私に憎しみの矛先が向いていたけれど、私は一応一番長くここにいてそれなりに実績もある。

——ただ、殿下の妃になるのはこの中の誰よりも力が弱く、来たのも半年ほど前のほとんど聖務もこなしていない女性だ。長年ここで頑張ってきた女性たちが、突然現れた部外者同然の存在に全てを持っていかれたのだから、悲しみは当然だ。

でも私は、そこまで悲しみを出せないでいた。

悲しいし、絶望もしたけど、進められなかったのは私自身だ。あの問題の初夜の後から随分時間が経ったのに何も変えられないでいた。後悔だけは、じわじわと心に滲んでくる。今更考えても仕方がない事だと分かっているけれど、殿下の美しい金の髪が陽光でキラキラと輝く度に、胸がキリキリと傷んだ。

クライヴ殿下の言葉が終わり解散となった。この場の解散という意味でも、妃候補という意味でも解散だ。

もうこの国の結界や防衛が上手く稼働しているし、殿下の即位も近く、同時に結婚と世継ぎも発表となるので妃候補の聖女たちは必要が無くなる。

皆それぞれの道へと向かい始めて、謁見の間からはゆっくりと人が減っていく。私も、静かにその場を後にした。

自室に戻ると、部屋の中はしんとしていた。

しばらくぼーっとしてしまって、窓枠から空が橙から深い紫へ変わっていくのを眺めていた。これからどうするか、頭の中で整理しようとするのに、うまくまとまらない。

でもひとつだけハッキリとしている事がある。

ここにはいられない。

殿下の事は好きだったし、今もまだ好きなのだと思う。

だからこそ、あの二人の姿をこの城で見続ける事は、私には無理だった。城内で何度も相手の女性の姿を認識したが、その姿を見るのが怖くて未だにしっかりと顔も見れていな

い有様だ。

これからどうするかは決めていないけれど、まずは城から出たい。

私を養子にし、城まで連れてきたラスター家は問題があったので随分前に殿下が縁を切らせてくれた。良い意味でも悪い意味でも、帰る所は無いので自由の身だ。

（私の十五年間は何だったんだろう……）

殿下との縁はこの城から出た瞬間に消え、家族もない。

……元から孤児だった私が、役目を与えられ、一時的にでも妃になれるかもしれない夢を見させてもらったのかも。年上の殿下の負担にならないよう、大人っぽく振る舞い、誇れる存在であるように聖務も頑張ったけれど……。

（無駄な努力は無いと言うけれど、無駄になる努力はあるものなのね……）

明日の朝にでも城を出る為、荷物をまとめていると部屋の扉を誰かが静かにノックした。

「……シェリル、いるか」

その声を聞いた瞬間、胸がざわりとする。クライヴ殿下だった。

少し迷ってから扉をゆっくりと開ける。見上げて顔を覗くと、殿下は普段より幾分か複雑に表情を曇らせて立っていた。

「突然すまない。少し、話をさせてくれないか」

「はい。……どうぞ」

部屋に通すと、殿下は座る前からすぐに口を開いた。

「シェリルには本当に申し訳なかった。皆の前では言いきれなかった苦勞を……特に長い間、かけてしまった」

「いいえ……殿下」

私はそこに関しては首を振る。

「確かにここに来たのは私の意思ではありませんでしたが、その後の選択は私が選んで納得してきたものです。殿下が謝られる必要はどこにも無いのです。それに私も……」

本当に言いたい事は伝えられず、言いかけて沈黙をする。殿下はギュッと辛そうに眉を寄せ、何か言いたそうにしていたけど、一度息を吐いて続ける。

「君には……縁談の話が山ほど来ている。殆どは断ったが……私の兄弟の中に、君の事を——」

私は殿下が何を言おうとしているかを察し、微笑んだ。

「ありがとうございます。殿下のお気持ちは嬉しいです。ですが、それはお断りさせていただきます。殿下が長年私の元へ通っていたことは、城中の者が知っています。実際の仲がどうであれ、そのように見える私を他の王子がお引き受けになるのは申し訳がありません」

殿下が何かを言いたそうにしているのを感じながら続ける。

「本当に、大丈夫です。一時でもこの国や殿下のお役に立てたのですから、十分です」
全て心からの言葉ではないけれど、今はそれで良い。殿下は真面目な人だから、私がここで弱さを見せてしまえば今後きつと何かきつかけがある度に罪悪感を感じてしまう。

「……何か、私に出来る事は無いのか」

いつも前を向き、自信に溢れた緑色の瞳は俯き、消え入りそうな声で呟く。

——それを言うなら、私を選んで妃にして欲しかったけれど。

それは決して言うてはいけない恨みの言葉だ。彼の人生にこれ以上暗い影を落としたくは無い。

殿下はしばらく黙っていたが、やがてゆつくりとポケットに手を入れた。

「これを受け取って欲しい」

差し出されたのは、大粒な深い青の宝石が連なるネックレスだった。薄暗くなつた部屋でもよく分かるほど、石が煌めいている。一目見ただけでわかる、途方もなく高価なものだった。

「今後困つた時、換金しても良い。誰かに譲つても良い。君が城を出た後のことを思うと……これくらいはさせて欲しい」

断ろうとして、でも殿下の表情を見て、やめた。これは殿下の誠意だから受け取らなければいけない。

「……ありがとうございます」

静かに受け取って、私も立ち上がった。机の中の小さな引き出しを開けて、中の物を取り出す。

「これを、お返しに」

片方だけのイヤリングだ。

殿下の目がわずかに揺れる。それがかつて自分が贈ったものだとすぐに分かったのだらう。

「……片方は」

「ラスター家の者にとられてしまいました」

さらりと事実を言う。殿下を困らせたくは無かった。

これは私が城にやってきてすぐに、殿下がくれた最初の贈り物だった。

「残った片方に、長い間魔力を込め続けました。命の危機に一度だけ身を守ってくれるはずです。どうか、持っていてください」

殿下は少しの間、イヤリングをじっと見つめてからそつと手のひらに包んだ。

「ありがとう、シェリル。……これを……取られていたのは知らなかった。君が私からの贈り物を全て辞退していたのは……」

「ああ、そうですね……。当時は私も幼かったので、また取られてしまったらと思うと殿下

に申し訳なくて……辞退する他無かったです。お許してください」

「……私が至らなかつた。すまない」

「いいえ。……明日の朝にはここから立ち去ります。結界もしつかり稼働しています。魔物の動きもかなり鈍化しています。長い間お世話になりました。クライヴ様の治世が平和でありますように遠くから祈ります。……どうか、お幸せに」

「……ああ。ありがとう」

殿下は扉の前で一度だけ振り返った。二人でほんのわずかに見つめ合い、部屋を出て行った。扉が閉まる音がして、廊下の足音が遠ざかっていく。

私はしばらくその場に立ったまま、動けなかった。



翌朝、昨夜のうちに詰めた鞆ひとつだけを持ち部屋を出た。聖務塔に向かい、お世話になった仕事仲間やすれ違った顔見知りには挨拶を済ませ、門を目指す。

外に出る為の手續きをしていると、殿下が馬車を手配してくれていたようで案内をされた。伝えれば好きな場所まで乗せてくれると告げられたが、あまり遠くまで送ってもらうのは申し訳なくて、比較的近いルフティ町までお願いすることにした。

馬車に乗り込んで、バッグを膝の上に抱えて息をつく。

もう城に戻ることは無い。今後の事はまだ決めていないけれど、ひとまず海に向かう事にした。時間はあるのだから、ゆっくり海を見たい気分だ。体力もあるし、ある程度の旅ができる攻撃魔法などもある。きつと大丈夫。

馬車が発車しようとした、その瞬間だった。窓をとんとん、と叩く音がした。

「すみませーん、一緒に乗せてもらえませんか？」

顔を向けると、窓の外に若い男が立っていた。長い黒髪に、珍しい赤い瞳。整った顔立ちに人懐っこい笑みを浮かべていて、悪い人には見えなかった。

「えっと……どうぞ……？」

断る理由も無いので、私は扉を開けた。

男性はぱっと顔を輝かせてお礼を言うのと、当然のような顔で、私のすぐ真横にぴたりと腰を下ろした。そして間もなく馬車が動き出す。

（……近い。どうして横に座ったんだろう。向かいも空いているのに）

殿下が用意してくれた馬車は上等なもので、こんなに密着しなければいけないほど狭くはない。警戒して思わず少し身を引いたが、男は気にした様子もなく、ご機嫌そうにして

いる。まあ、そんなに長い時間では無いし、深く関わらないようにすればいいか。

「シェリルはどこまで行くの？」

「えっ？……えっと」

焦って脳内をフル回転させるが、この男性は知り合いでは無いはずだ。美しい顔立ちに赤い目、この特徴を忘れるとは思えない。

「私のこと、ご存知なのですか？」

「もちろん。あ、敬語はやめてよ」

あっさりと言われて、少し戸惑った。でも城から来たのだから、知っていて当然か。あまりに自然に対応されるから知り合いかと思ってしまった。

私はもう聖女として役目は終わっているし、この男性は年下のようにだし普通に会話しても良いかな？

「私はルフティ町までなんだけど」

「そうなんだ。じゃあ僕もそこまで」

男性はニコリと笑いサラッと告げる。

それから男性は、やけに静かだった。

静かなのは良いけど、問題はその視線だ。ちらりと横を見ると、男がじっとこちらを見つめている。隠す気も全くないようだ。

「……あの……何？」

「んーん、何も」

ニコニコしたまま、全く悪びれない。私は再度前を向き直したが、視線はずっと続いていた。

「ひゃっ……！な、に」

いきなり膝に手が触れてきて、おかしな声を上げてしまった。すぐに向かいの椅子に移動し、男と距離を取る。

「え……ごめん」

男を正面から見ると、自分から触っておきながら驚いた様子で目をパチクリさせて私の顔を見ている。

（……なんなのこの人。変だわ）

「あの……あなた、何者なの？」

「何者って？」

「名前も知らないし、私のことを知ってるみたいだし、見てくるし触ってくるし……城の人なのよね？」

「まあ、そうだね」

改めて見ると、本当に整った顔をしている。艶のある黒髪は少し乱れていて、赤い瞳はどこか楽しそうに細められている。歳は私よりずいぶん若そうに見えるが身なりは良い。

「お名前を、教えてくれるかしら」

男は顎に手を当てて考えていたが、それから少し身を乗り出して顔を近づけてきた。

「レナン」

トーンの落ちた静かな声だった。

「レナン・アストリア。君のよく知ってる……クライヴの弟だよ」

私は固まった。アストリア……クライヴ殿下の弟。つまり、王子。

「……っ、失礼しました、私は——」

「いいんだ、シェリル」

慌てて姿勢を正そうとした私の肩をレナンは優しく押さえて、再び隣にやってきて腰を下ろした。

「敬語やめてよ。僕のこと、ただの男だと思つて」

「……そんな無茶な……」

「レナンって呼んで。敬語使ったらこの馬車を引き返させて城に強制送還だ」

「……わかった。言う通りにするからこのまま進みましょう」

レナン・アストリア。この国の第五王子だ。これまで公式な場に姿を現した事が無いので全く分からなかった。王族として仕事はしつかりされていただけ対人恐怖症で外に出られないと噂を聞いた事がある……ニコニコと屈託のない笑顔を向けられて、そのようには見えない。全く、人の噂とは当てにならないものだと思い知る。

「シェリルが悪いんだよ？僕、シェリルと結婚したいって兄さんに頼んだのに断るから」

「あ……そういえば昨日、クライヴ殿下がそんなことを言っていたような……」

「そうでしょ？だから着いてくることにしたんだ」

いきなり肩を抱かれ、体を横に引き寄せられる。

「きゃ……っ、……っ、着いてくるって？どこまで？ちよつと近い、離れて」

「そんなの当然、シェリルが行く所全部だよ。シェリルがいる場所が僕の居場所だ」

そう言いながら顔を近づけてくるので嫌な予感がして反射的に手で顔を押しつけてしまったが不敬罪にはしないでほしい。そもそもなくて、今顔を合わせたばかりの相手にこんな

にも気持ちを向けられるのかが分からない。

「何で私に着いてくるの？若いんだし、もっと良い女性がいるわ。次の町で引き返したらどうかしら？」

「シェリルは年下の男は嫌いなのか？」

そういう問題じゃない……が、そういう事にしてしまえばこの王子も諦めて引き返すかもしれない。いくら王族でも年齢は変えられない。

「そうね……クライヴ殿下も私より少し年上だったし、私は頼りがいのある年上の人が好きなのかも……？」

ちらっとレナンの顔を伺うと、目が据わっていて何やら危ない雰囲気笑みを浮かべていた。間違えたかもしれない。

「頼りがいのある……ねえ？……シェリル、兄さんに頼った事あったっけ？」

レナンは長い足を優雅に組み、こちらに意地悪い視線を向ける。

何をどこまで知っているかは分からないけれど、確かに言われてハッとした。私はクラ

イヴ殿下にあまり頼ってはいなかったかもしれない。

「……あんまり、無い、かもしれないけど」

「あんまりじゃ無いんじゃない？ シェリル、甘えるの下手そうだし」

「っ……そうかもしれないわね」

なぜこの王子は私の事が分かるのだろう。クライヴ殿下から何か聞いているのかしら。どちらにせよ、あまり居心地が良くない。私が口ごもると何故か満足そうに微笑み、またニコニコとしている。何を考えているのかが分からない。

「シェリルと兄さんの事が知りたいな」

「えっと、何を？」

一応、世間の目では私という存在はクライヴ殿下からの寵愛は受けていたけれど子供を授かれずに他の女性に先を越され城を出るという結構かわいそうな立場だと思うのだけだ。自分でよくよく考えて胸が痛む。

——終わった関係の、いまさら何を知りたいのだろうか。

「いっぱいあるよ？二人が今まで何回セックスしたのかなとか、どんなプレイしたのかなとか、好きな体位とか、シェリルの敏感なところってどこかなとか——」

「は、はぁー?!」

あまりにも下世話な質問を直球で聞かれ、目の前がくらくらした。ひどすぎる。こんな王族がいるのか。でも王族じゃなければ引つ叩いてしまいそうだ。

（クライヴ殿下とはまるで真逆……）

「……お相手の、クライヴ殿下にも関わることでから私の口から言えるはずがないわ」

「えっ、本当？じゃあシェリルの事だけ教えてくれる？」

「教えるわけじゃないでしょう！」

この男は町へ着いたら撒かないと危険だ。不敬になるかもしれないけれど、とても一緒

に行動はできない。

私は町に着いたら、まずレナンから逃げる事だけを考えて馬車の中をやりすごす事にした。

「ねえシェリル」

「はあ……何？」

「あれ？何か冷たい？僕のこと嫌い？」

初対面であんな質問をされて好きになる方が難しいと思うけれど、まだ若いし公式の場での交流も無くて人とのコミュニケーションに慣れていないのかもしれない。それでも驚いた事には変わらないので固い態度を取ってしまう。

「嫌い、ではないと思う。でも、好きではないわ」

しまった。ついそのまま言ってしまった。さすがに気を悪くさせてしまったかもしれない。しかし顔を見ても相変わらず微笑むだけで特に怒っている様子は無い。

「僕に対してはシェリルが思った事を全部言ってくれていいんだ。そのまま何でも教えて。何を言われても絶対に怒らないし受け止めると約束するよ」

「……本当に？」

「うん。シェリルが僕を見てくれて、話してくれるだけで嬉しい」

レナンは私の手を取ると、口元へ寄せて指にちゅ、とキスをする。

「っ……話せるだけで嬉しいなら、ボディタッチはしなくていいんじゃないの？」

「僕もそう思う。……人間って欲深い生き物だね」

「それはそうね……」

私だってそうだ。最初は城へ連れてこられてたくさん努力して、聖務で認められて……それだけで必要とされて嬉しかったのに。

——いつの間にかクライヴ殿下の妃になりたいと思ってしまっていた。欲深いから罰があたったのだろうか。

「シェリルはどこまで行くの？」

無邪気なレナンの問いで現実引き戻される。

「特にまだ決まっていらないんだけど、ゆっくり海でも見ようかと思って」

「へえ、良いじゃない。レガノ海岸が一番近いけど、あの一帯はまだ魔物の目撃情報もあるし少し危ない。僕がいて良かったね」

「攻撃魔法は専門ではないけど私も少しは戦えるわ。レナンは強いのか？」

「僕は魔法特化だからね。兄弟の中で純粹に魔法だけだったら一番だよ」

「へえ、すごいのか。てっきりクライヴ殿下が一番だと思っていたわ」

クライヴ殿下は努力家で体軀にも恵まれていて物理面での劍術は最強だが、魔法の才にも恵まれていた。戦いでは時に護衛を置いて先頭に立ち、魔物の群れの中でも負けていなかった。その殿下よりもレナンの方が魔法が強いとなると相当だ。レナンを見る限り、身長はあれど体はそこまで鍛えているという感じでは無いが、魔力の才は見た目では分からない。

「あれ？ やつと僕に興味持ってくれたのか？ いいよ、たくさん見て」

顎を指で持ち上げられ、腰を引き寄せぐつと距離を縮められる。

「ちよつと、近いわ……あなたの顔しか見えないじゃない」

「あ、ごめんね。シェリルは僕の顔じゃなくて体が見たかったんだね？ いいよ。服、脱ごうか？」

「な？！ ぬ、脱がなくて——きやつ」

レナンのとんでもない提案にうろたえていると、突然馬車がガタガタと揺れてバランスを崩しそうになる。腰に回されている手に力が入り、体が密着する。

「この辺はちよつと揺れるから。……こら、逃げないで」

反射的に体をねじって逃れようとしていた。でも、ただボディタッチをしたかったのか、先回りして支えてくれたのかの判断がつかないのは、これまでの振る舞いのレナンが悪いと思う。しかし本当に馬車が激しく揺れているので、大人しく言う通りしておく。

こんなに異性と密着する事なんて今まで無かったから、心臓がバクバクと音を立てる。

「言う事ちゃんと聞いて可愛いねシェリル。ここはすぐ抜けるからそのまま良い子にしている」

近くにいるから聞こえるのに、絶対にわざと耳元で囁いてくる。

落ち着いて。振り回されちゃだめ。相手は王子、相手は王子、年下、年下……。

「ふう……」

なんとか揺れの収まる通りに出たようで、レナンから距離を取り窓の外を見る。この辺りならあと少し、昼前には町へ着く。王族は町でふらつと食事ができないと思うし、そこでレナンと離れよう。

「今日はこれからどうするの？町へ着いたら食事？」

「ええ。適当な店で食事を済ませて先へ進むわ」

「そう、わかった」

相変わらずニコニコとこっちを見ているレナンの心情は読めない。

「あなた、本当に一人で来たの？護衛は？」

「見えない所に何人かいるさ」

「そう……」

王族がこの警備の薄さで単身行動するのは前代未聞だ。さすがに護衛がいるのは嘘ではないと思うけれど、軽く気配を探ってみても護衛らしき人間の動きは感じない。

何かあったら私が守らないと。

町へ着くと、馬車はゆっくりと速度を落として門の前で止まった。

「ありがとうございます」

荷物を持ち、レナンの手を借り馬車を降りて、御者にお礼を言う。レナンは御者と何か

話しているようでこちらを見ていない。

(今だわ！ここで撒かないと)

私は人通りの多い方へ早足で歩き出した。あの中に入ってしまえば良い。姿をくらしで目立たず食事をしてさっさと町を出れば――。

「シェリル、そんなに急いでどうしたの？」

あっさり追いつかれた。するつと自然に横に並んで来る。笑顔が少し怖い。
私は内心ため息をつきながら、諦めて歩く。

「お腹空いてない？」

「……食事が済んだらすぐに出発するわ」

「うん、わかったよ。じゃあここにしよう」

レナンが指さしたのは、通りに面したこじんまりとした食堂だった。王族が入るような店では無いが、レナンは気にした様子もなく扉を開けた。昼前の食堂はまだ空いていて、窓際の席に案内される。簡単なスープとパン、焼いた肉の料理を頼む。レナンは私と同じも

のを頼んで、出てきた素朴な料理を意外にも黙って食べていた。

「美味しいね、シェリル」

心からそう思っているような笑顔で言うので、少し拍子抜けしてしまう。

「ええ……おいしいわ。でも、あなたにとっては城の食事の方が美味しいでしょう？」

「それはそうだね。でも城ではシェリルと一緒に食べられないし」

少し寂しそうに言う。この王子は、どうして今まで表に出てこなかったのだろう。何か理由はありそうだけれど、ただの一般人の私が聞くような事でもない。あまり踏み込まないようにして深堀りを避ける。

食事を終えると、私はすぐに立ち上がった。レナンが代金を出すと聞かなかったが、撒こうと思っている相手にご馳走になるのは心が傷むので断固として拒否をした。

今のうちに必要な物を買って込んで町を出なければ。野宿の道具、保存のきく食料、水。頭の中で買い物リストを整理しながら市場の方へ向かう。

「何買うの？」

「野宿の道具と食料よ」

「へえ」

レナンはそれだけ言って、私の後をついてくる。邪魔になるかと思ったが、意外にも余計な口は挟まず、かといって撒ける程でもない絶妙な距離感を保っている。私も戦場で仕事をすることがあったし、ある程度の戦闘能力はあるけれど、レナンは隙が無い。恐らく本人が言うように結構な手練れだ。聖魔法特化の私の能力で撒くのは難しそう。

——となると、私が野宿をするということはレナンも野宿をしなければならない。渋々だけれど、さすがに二人分の量の買い物をした。するとそれを察したのか一層ご機嫌になり、荷物が増えると自然に手を差し出して持ってくれた。荷物を持ってもらっているのもう撒く事は不可能となってしまう。

一通り買い物を終えて町の外へ出ようとするが、その前に一応念押しをする。

「ここからは徒歩だし、しばらくは町が無いから野宿よ。王子が来る所じゃないと思うけど。引き返した方がいいんじゃない？」

「気にしてくれるの？優しいねシェリル。僕は大丈夫だよ。さあ行こう」

全く離れる気は無いらしい。立場的に大丈夫なのだろうかと思いつながら町を出る。

しばらくすると道は細くなり、石畳から砂利の道へ変わった。さらに進むと、木々や草が道の両側から迫り、日差しも遮られる。ところどころに木の根が張りだしていて足元も不安定になっていった。

「シェリル、ここ危ないから」

ふと手を取られた。大きな根が出た段差のところで、レナンが先に渡ってこちらへ手を差し伸べていた。さっきまで私の後ろにいたのに、いつの間にか私がレナンの後に着いてしまっていた。

「……ありがとう」

思いがけず丁寧に誘導されて、少し戸惑いながら手を借りた。

しかしそれから気を良くしたのか、事あるごとに手を繋いだり、狭い道で腰を抱かれたりと何かとちょっかいをかけてきた。そして妙に饒舌になったり恥ずかしい事を聞いて来たりでうるさいだけかと思えば、足場の悪いところでは必ず手を貸してくれたり体を支えてくれる。

それでいて、岩が転がり、傾斜がきつい道でも涼しい顔で歩き、息も乱れていない。

（体力も根性も意外とあるのね）

公の場に姿を現さない割には、体力もあるし足場の読み方も様になっている。不思議な人だと思いつながら、先へ歩き続けた。

日が傾き始めた頃、足がじわじわと痛み出した。さつき着地するときに軽くひねった所が悪化してしまったようだ。

（でもまだ限界では無いわ。夜までもう少し先に進んでおきたい）

表情には出さないようにして歩き続ける。しばらくすると道が緩やかになり、木々の間に平らな草地が広がる。耳を澄ますと川の音が聞こえてくるので水場も近そう。野宿をするには申し分ない場所だ。

「ここで休もうか」

レナンが足を止める。

「待つて、まだ進めると思うわ。日が完全に暮れるまで時間もあるし、きつとしばらくは今

みたいな穏やかな道よ」

「だめだよ」

レナンの声が、これまでとは少し違う色をしていた。こちらを振り返る顔は、笑顔ではなく真剣な表情だった。

「足、傷むんでしょ」

ドキリとした。確かにそうだけど、私より前を歩いていたはずなのにどうして分かるのか。

「そうだけど、まだ歩けない程ではないわ」

「だめ、ここで休む」

有無を言わさない口調だった。これまで笑顔で捉えどころのない発言ばかりしていたのに、ここにきて真剣な顔をするのか。

「でも本当に——」

「シェリルに痛い思いをして欲しくない。だからここで休むよ。これはお願いじゃなくて命令。言う事を聞いて」

命令と言われれば、王子であるレナンの言う事に反論なんてできない。

諦めて地面に荷物を置いて冷静になると、確かに結構な痛みかもしれない。

今までの聖女としての私なら、確実にそのまま無理をしていたし、誰かに止められる事も無かつただろう。

限界が来る前に休む、という選択肢を誰かから与えてもらったのは久しぶりかもしれない。

「わかった」

小さく頷くと、レナンはまた笑顔になり「よし」と満足げに言う。それから右手をさっと動かすと、足元に魔方阵が淡く光り、大きなテントが現れる。

「はい、今夜のおうちだよ」

「え！すごいわ！魔法でテントを出せるの？」

「便利でしょ。頑張って研究したんだ。なかなか魔力食うんだけどね。防音と防犯と保温機能も付いてて中も広いよ」

ひらりとテントの入口を開けて、どうぞと手で示される。

「……ひとつしか無いじゃない」

「うん。でも広いから」

「二人で入るつもり？」

「もちろん」

あっさりと言つてのけるので私は首を振つた。

「無理よ。未婚の男女が、ましてあなたは王子なんだから。私は外で寝るわ」

「絶対だめだよ。それなら僕が外だ。ほら入つて」

「待つて、私はただの女なんだから——」

その瞬間、右腕にチクリとした痛みが走つた。

小さな痛みだったが、その場所を見ると、服の上から細い針のようなものが刺さつていた。これは……魔物では無い。人間の手による遠隔攻撃——そう理解した瞬間、視界がぐにやりと歪む。

「つ……レ、ナン……麻痺、針……逃げて」

体の力が抜け、倒れると思つた体をレナンが受け止めた。違う、逃げて欲しいのに。

「シェリル……ちつ、逃がすな！」

レナンが緊張した声で言い放つ。周りの気配が動いて、散つていく音がした。そうか、護衛か。本当にいたのだと、遠くなつていく意識の中であんなに思つた。

「んう……」

目が覚めると、テントの中にいるようだった。腕が上がらない。全身が重だるくて、無理に起き上がろうとすると、横からすつと手が伸びてきて上体を起こしてくれた。

「ゆっくり起きて」

レナンだ。起き上がってその姿をぼーっと見つめるが、怪我はなさそうだ。ひとまずレナンは無事らしい。本当に良かったと安堵する。

「話せる？体は辛い？」

「はなせう……からだ、うごかない……いたく、ない」

舌が鈍く、分厚くなってしまうような感覚で呂律が回らない。子供のような話し方になつてしまう。レナンは私の頭を撫でると話し始める。

「軽い痺れ毒だろうね。半日も経てば回復するよ。ちなみに狙われたのは僕じゃなくてシエリルだからね。ここに来るまでに何度も奇襲は来ていて警戒していたんだけど、護衛たちが対処していたんだ。僕も油断していてごめんね。シエリルの事を欲しがる人は君が思っている以上に多いんだよ」

そんな話は初耳だ。私は聖女としての能力はあるけれど、最近では治安も良くなってきた。いるし癒しの力はあるに必要が無い。女としてなら私より若い令嬢などたくさんいるし、まして私は貴族ではないので後ろ盾も無い。

「なん、れ……？」

全く理由が分からず、教えて欲しいという目でレナンを見上げる。舌が上手く回らない。「一番は君が美しいからだよ。それに真面目によく働くし力も確かだ……あとは、次期王のお気に入りだった君を自分の手に収めて楽しみたい……下衆な男は大勢いるということだ」

その理由が本当かどうかは分からないけれど、本当に私だけを狙っているなら一緒に行動しているレナンも危険に晒してしまうのではないだろうか。

でも、レナンが助けてくれなかったらどうなっていたか……想像して頭が冷える。

「レナ……たすけ、てくれて、ありあとう」

レナンを見つめてお礼を言うと、安心させるように優しく目を細めてくれた。助けてもらったからなのか、自分が今弱っているからなのか、さっきまで警戒していた相手だといふのに安心感に包まれてしまう。

「シエリル、今動けないんだよね。服脱がせて襲っちゃおっかな」

「っ！いや、あ~~~~」

一瞬でも感じた安心感を返して欲しい。

「あはは、冗談だよ。喉は乾いてる？お水飲める？」

「のめう」

レナンが持っているボトルに手を伸ばそうとするが、手が動かない事を思い出す。レナンを見ると意地悪く微笑みながらボトルに口を付けて飲んでいた。嫌な予感がする。

「飲ませてあげるから、口開けて」

「ひっ……いあ」

「どうして？嫌じゃないでしょ。口開けないと飲めないよ、ほら」

自分が飲んだばかりのボトルの口を、私の顔に近づけてくる。これでは間接キスになってしまう。嫌だと首を振りたいのに、首も動かない。

「ちがうのっ……してっ」

「だめだよ。……あんまり駄々をこねるなら口移しするけど。どうせこぼしそうだし」
そう言うのとボトルにもう一度口をつけて水を含み、その唇を近づけてくる。

出してしまった。

レナンが子供みたいな笑顔で笑っている。馬鹿にするでもない、肩を震わせ純粹に屈託なく笑っているその表情を見ると、より若さを感じる。……にしても笑い過ぎだ。

「わらわ、ないれ……」

「はははっ、ごめんごめん。だってシェリルのような美しい人でもあんなお腹の音が鳴るなんて……大人しく水飲んでたのに……くくっ……はははははは……くっ」

美しい人……？レナンにはそう見えているのか。笑いながらも、濡れた口周りをタオルで拭いてくれる。恥ずかしいけど、抵抗ができないので仕方がない。

「ご飯食べさせてあげたいけど、噛めないだろうし喉を詰まらせたら大変だ。痺れが消えるまで我慢してね」

「ん……」

「眠れるかな？」

「ま、って……」

「ん？」

どうしよう。お腹の音が鳴るより、水を噴き出すよりもっとまずい事が起きている。

——トイレに行きたい。

困った。今は一人だと立つこともできないし、座る事もできない。外に行こうにもきつと護衛の人がいるだろうし……。手伝い無しではすることができないのに、麻痺のせいもあるのか尿意を自覚するとなんだか冷や汗も出てくる程に、いつもより限界が近い気がする。でも、レナンに言ったら最悪の展開になりそうであまり言いたくない。

「……………」

「何？言いつらい？服替える？」

「きがえ、ない」

「優しく脱がせてちゃんと着せてあげるよ？」

「……………いれ」

「ん？」

「といれ……………」

「ああ！トイレか！いいよ、しよつか」

「そと、つれて、て」

「外には護衛がいるよ。皆に見せつけながらしたいの？」

「つやら……っ」

「仕方ないからここでしようね。ほら、タオルで押さえててあげるから」

「えっえ？」

レナンがタオルを取り出し、私の背後に座る。後ろからスカートをたくし上げようとするので、必死に声を上げる。異性、ましてや王子に下のお世話をしてもらうなんてとんでもない。してもらうにしても外の護衛の人のほうが絶対に適任だ。

「や、まって、れなん、らめつ、ほかのひと……してえ」

「はあ？他の人の前で放尿するの？絶対だめ」

「う……らって、れなん、おうじらから」

「最初に言っただけでしょ。僕のこととはただの男だと思って。それに僕は兄さんと比べて王族っぽくないし」

そういう問題ではないけれど、確かに入口が違うからかレナンの人柄なのか、クライヴ殿下と一緒に居る時のような緊張感はない。言いたい事は結構言えていると思う。でも、だからといってここまでさせるのは無理だ。

レナンの手がスカートをたくし上げ、ショーツに手をかける。動かない体が恨めしい。

「やら、やらあつ！やあああ」

「そんなに拒否されると傷つくなあ……でもシェリルの我儘だよ？こうなってしまったから仕方ないじゃない。ずっと我慢するつもりなの？」

「……うう」

確かに痺れが切れるまで我慢は到底出来そうにない。そうなると粗相をする未来しか見えないし、考えたくないけどその処理もレナンにしてもらうことになってしまう。

「目、瞑ってるから見えないよ。タオル当てるだけだから音も聞こえない。我慢すると体に良くないからいい子にして」

「みみ、やめてっ……わかつらから……」

耳元で囁かれる。首が動かせないの、背後にいるレナンが本当に目を閉じているのかは分からないが信じるしかない。私の体を背後から支えながら足も動かしてショーツを器用に脱がす。

（スースーする……恥ずかしい）

太ももを少し開かされる。見ているのではないかと思うくらいの確かな位置にふわふわと

したタオルが当てられてぞわぞわとする。

「……っあ……」

「タオルの位置、大丈夫？」

「……らいじょうぶ」

「じゃあ押さえてるから、していいよ」

していいよ、と簡単に言われても……。目を瞑っているとはいえ、股の間にレナンの手でタオルが当てられている状況に心が追いつかない。さっきまで冷や汗が出そうな程の尿意だったのに、全然出る気配が無い。体に力を入れようにも、下半身に力が入らず、いつもどうやってしていたつくと焦る始末だ。あまり時間もかけたくない。落ち着いて深呼吸をしてみても、やっぱり出せそうにない。

「う……ふう……」

「どうしたの？出せない？泣いてるの？」

「とうしょう……だせな……」